

## 答 辞

思いのほか寒く、厳しかった冬も終わりを告げ、窓から見える風景もどことなく春を感じさせるものとなってまいりました。私たちは、思い出深いこの学舎を卒業します。

本日は、私たち卒業生の為に、このような立派な式典を挙げていただきました。誠にありがとうございます。また、ご多忙の中をご出席くださいました御来賓の皆様、学院長先生・理事長先生はじめ諸先生方、並びに関係者の皆様に、卒業生、一同心から御礼申し上げます。

思い起こすと、三年前の四月、私がこの作新学院への入学を決めた時に友人がくれた

「そこには、きつとあなたに天が与えてくれた使命のようなものがあるんだよ」という言葉を、お守りのように抱きながら正門をくぐりました。

そして、それ以来、その「使命のようなもの」を探し続けてきたように思います。私自身が自分の使命を果たすことができたかどうかということは、卒業式を迎え、胸を張って校門を出て行く時に、初めてわかるのだと、今日まで信じてきました。

三年前の入学式。まだ着慣れない新しい制服に身を包んだ私たちは、暖かい風に包まれながら桜の花の散る正門をくぐり、吹奏楽部の演奏によって華やかに彩られたこの総合体育館で、ここにいる千二百名を超す同級生たちとともに、作新学院の生徒となりました。そうしてそれぞれが新しい環境の中で、新しい友達を作り、新しい目標を手に入れ、この作新学院に自分の居場所を見つけていきました。私は、一人ひとりが多くの個性を持つ、まさに多様性豊かな作新学院で知った、自分の知らない世界の広さに衝撃を受けました。

そして、英進部・総合進学部・情報科学部の三部の垣根を越えて活動する生徒会なら、そんな世界をより広く知ることができるのではないかと思い、自ら生徒会の門を叩き、そこで多くの活動や貴重な体験をさせていただきました。

野球部をはじめとする運動部の大会応援に参加した時には、真剣勝負のスポーツの迫力や、会場の一体感を初めて肌で感じました。マウンドに駆け寄り、選手の姿や、応援のスタンドを覆い尽くす黄色Tシャツ、顔を真っ赤にして楽器を演奏する吹奏楽部や、両手を大きく振って声を張り上げる応援団。そんな姿を目にしてから、放課後のグラウンドや体育館から聞こえてくる掛け声を身近

に感じるようになりました。全校集会で表彰式や激励会が行われるたびに、作新学院の看板を背負った仲間たちが全国で活躍していることを誇りに思いました。

また、朝早く登校して教室に入ると、同じ目標に向かって勉強するクラスメイトたちがいました。暑い夏も、寒い冬も夜遅くまで電気を煌々と灯した教室で、必死に机にしがみつきました。心が折れそうになった時は、彼らの背中を見つめ、静かな教室の中に響くシャーペンがノートにこすれる音を聞いて、気持ちを奮い立たせました。また、そんな私たちと目標を共有していただき、教え導いてくださった先生方の存在はとても大きいものでした。先生方の言葉の一つ一つが、手探りで進む私たちの歩く道の前方を常に照らしてくれていたことを、私たちは決して忘れません。

そして、高校生活三年間の思い出は、学校のものだけではありません。心の中にじんわりと広がるのは、どんな時も私たちを見守り、温かい食事を作ってくれて待っていてくれた家族への感謝の気持ちです。部活動や受験勉強で自分に余裕がなく、「ただいま」も「おやすみなさい」も言わずに部屋に籠もってしまった夜も、つい鋭い言葉を投げつけてしまった日も、ただ私たちの成長だけを願ひ、支えてくれた家族の存在と温かさを、今日改めて実感しています。普段はなかなか口にできない言葉ですが、人生の一つのけじめを迎えた今日は、素直に言えます。

「三年間ありがとう」

お別れの時が近づいてきたようです。在学中は、新しく入学してきた後輩たちが、作新学院の生徒であることを誇りに思うような学校にしていきたいと考えて行動してきましたが、今度は、作新学院の誇りと思われるような卒業生になることを目標に、それぞれの道で頑張りたいと思います。

私たちが先輩たちから受け継いだバトンは、後輩たちに託します。多くの人の、たくさんのお思いが詰まったバトンです。来年、再来年、そして何十年後も、後輩たちがこの伝統ある作新学院を守り、新たな歴史を築き上げてくれることを心から願ひ、答辞とさせていただきます。

平成二十八年三月一日

卒業生代表 吉上 葵